

研究発表

日本の近代文学と中国作家

Japanese impact on modern Chinese writers

鄭 清 茂*

Abstract

Most Chinese writers who were active and influential during the twenties and thirties, known as the May Fourth Era, had studied in Japan. These writers, like Lu Xun, Zhou Zuoren, Yu Dafu, and Guo Moruo, all started their literary activities while in Japan and, as a group, were soon to become the dominant force behind the creation and development of modern Chinese literature.

It was the miracle of Japan's success in modernization, of which literature was an integral part, that initially impressed, fascinated, and drew thousands of Chinese students, including many youthful literary aspirants, to Japan in pursuit of "modern civilization". The objectives of this paper are to determine whether the Japanese literary trends since the Meiji Restoration had any impact on Chinese writers; if so, in what way, to what extent, and why. Furthermore, since modern Japanese literature was brought about under strong Western influence, was the

* Ching-mao Cheng [現職] マサチューセッツ大学教授

Japanese impact on Chinese writers important in itself or did it serve mainly as a channel for Western impact? If it indeed served as a channel, did it deflect or add to the Western elements?

In dealing with these issues, I will not limit my approach to that of literary indebtedness or literary relations in its narrow sense. For the writers under consideration were also intellectuals who refused to be idle spectators in times of profound social and political charges. They were more interested in, and concerned about, the practical use of literature than its intrinsic value. They tended to believe that their literary endeavors could enlighten the people and, therefore, contribute greatly to the process of China's modernization. Such being the case, it is imperative that other external factors, such as the social conditions, political environments, and cultural traditions of China and Japan during that particular period be closely examined, compared, and contrasted in the larger context of the modernization of both countries.

私の演題は「日本の近代文学と中国作家」というのでありますが、ここでは与えられた時間が短いし、それに私の勉強もまだ不十分極まるものでございますので、お手元の「研究発表要旨」に書いてあるような行き届いたお話しは、無論私の手には負えません。私はただ私がこれまで直面してきた問題、せめてその二三に触れながら、極簡単に私見を添えておく程度に致します。結局は、問題の提起に止まった大変お粗末な報告になると思いますので、前もって御了承願います。

一般に、中国近代文学の発足は、魯迅^{ろじん}がその短篇小説「狂人日記」を書いた1918年（大正7年）、或いは人によっては、胡適^{こてき}と陳独秀^{ちんしゅう}が「文学改良論議」と「文学革命論」をそれぞれ発表したその前の年とされていますが、偶発的事件ではもとよりなく、その氣運が熱すまでには、長い時間が掛ったことはいうまでもありません。

御存知の通り、中国は阿片戦争（1839～1842）で敗北を喫してから、内憂外患が頻発し、憂国の士はどうしたら国を救うことができるか、と日夜腐心していました。その内に日本では明治維新が起り、文明開化、富国強兵の旗を掲げて近代化を着着と進め、遂には日清戦争（1894）で中国を敗り、引続いて日露戦争（1904～1905）でロシアに勝つというような目覚ましい成果をもたらした。自国が敗戦したことは辛かったけれども、敵国日本の成功振りを見て、心底から感服し、中国の将来の在り方について一つの解決策を得たのです。それは取りも直さず日本の近代化を学ぶということでありました。

近代化ということはもともと西洋化に外ありません。そこで中国においても、日本人が「和魂洋才」といったように、「中学為体、西学為用」という題目を唱えだしました。いわゆる洋務運動です。この洋務運動の主な指導者は張之洞ですが、彼は「勸学篇」（1898）を著して、その中で、「西学は甚だ繁、凡そ西洋の切要ならざる者は、東人已に刪節してこれを酌改す」といい、又「我れ徑を東洋に取らば、力はぶけて效すみやかなり」といっています。すなわち西洋の文明は、日本人がとつくにその良い部分を習得しているから、日本の徑路^{ルート}を通じて学んだら早い、いわば事半ばにして功倍すという安易な構想です。そこに留学生が日本へ派遣されることとなります。その数は毎年急速に増えて、日露戦争直後になると12,000～13,000人に達しました。洋務運動は結局うやむやに終わりましたが、続いて「変法自強」と称する運動が始まります。これも日本の君主立憲体制を模範とした政治改革運動で、日本との深い関連は矢張り無視することはできません。

この革新運動も戊戌^{ぼじゆつ}政変（1898）で失敗に帰りましたが、その主導者の一人

であった梁啓超^{りょうけいちよう}は、辛うじて国から逃れて余儀なく日本へ亡命し、引き続き中国の啓蒙運動に専念して、多方面にわたって深い影響を及ぼしました。政治的土台を失った彼は、日本で「清議報」、「新民叢報」、「新小説」を次々に発刊し、思想的啓蒙を中心に論陣を張りましたが、なканずく中国の若い知識人の目を開いたのは彼の小説論でした。「一国の民を新たにせんと欲せば、一国の小説を新たにせざるべからず」(「論小説与群活之関係」という類です。これは明らかに明治 10 年代に流行った政治小説に啓発されて生れた構想ですが、その功利主義的価値観にも係らず、非常に新鮮に思われて、多数の青年、とりわけ在日留学生をして、実用の学向から文学へ転向した結果をもたらしたのであります。

例えば、周作人はこのことについて、

◀それまで中国で小説を作ることは、もともと「下劣な賤業」で、誰一人見むきもしなかった。庚子—19 世紀最後の年—になってから、「清議」「新民」各誌が出て、梁任公(啓超)は「小説と群治の関係」を説き始め、ついで「新小説」を刊行した。これは一大改革運動といえるので、恰も明治初年の状況に似ている。「佳人之奇遇」「経国美談」などは、その時に「清議報」に訳載されたし、「新小説」に発表した梁任公自作の「新中国未来記」も、皆政治小説であった。▶

(「日本近三十年小説之発達」)

とっています。換言すれば、梁啓超が政治小説というジャンルを高く評価したお陰で、従来軽視されてきた小説も、一般的にその価値や有用性が認められ、いやしい日陰の存在から一変して、重んじられるようになったのであります。

梁啓超が日本で「新小説」誌を始めたのは 1902 年ですが、それに応じてか、国内でも小説誌が知識人によって次々と発刊され、小説の創作や外国小説の翻訳がにわかに盛んになります。しかしこの時期の作品は、概して伝統的な「章回小説」の形式をとり、当面の社会や官僚界の暗黒面を暴露した、いわ

ば勸善懲惡的なものが多く、形式、技法などの面において、まだまだ近代小説とはいえません。ただ梁啓超の小説観、すなわち小説には人心を支配し、社会を改革し、政治を新たにす「不可思議の力」があるという考えは、これら 20 世紀初めの前近代的小説においても、違った形ではあるが、すでに働いていることは否認できません。又、この価値観は新文学時代に入ってから、表面では反発されていながら、ともかく一つの底流となって流れ続けていると思われるのであります。偽えば魯迅は「私が如何にして小説を書くようになったか」と題する一文の中で

〈私はやはり十数年前の「啓蒙主義」を抱いていて、必ず「人生のため」でなければならず、しかもこの人生を改良するためだと考えている。……従って私の取材は、多く病的社会の不幸な人々から選んだ。病苦を暴露して療養の注意を促すからである〉

（「我怎麼做起小説来」）

と自分の態度や趣向を語っています。又例えば、芸術の独立、自我の追求、個性の尊重を唱え、浪漫主義運動を起した郭沫若^{かくまつじやく}、郁達夫^{ゆくたつぶ}を代表とする創造社の作家達が、間もなく自我や個性の放棄を宣言して、マルクス主義による革命文学に転向したのも、ある意味で政治小説となお一脈通ずるものがあるといっても差し支えありません。

さて、梁啓超を筆頭とするいわゆる「小説界革命」の作家達が、古い形式に新しい内容を盛りこむ実験と取り組んでいた 20 世紀初期の約 20 年間、日本では政治小説はとうに過去のものとなり、1880 年代から、坪内逍遙の「小説神髓」や二葉亭四迷の「浮雲」によって始まった近代文学も、浪漫主義、自然主義などの高潮を経て、白樺派の理想主義文学の全盛期を迎えようとしていました。それにも係らず、梁啓超は見むきもしませんでした。しかし一方、同じ時期にこの日本近代文学の歩みを身近に見つめていた一群の若い留学生がいた。彼らは日本文学界の新しい思潮に触れ、新しい作品を読んで感動し、文学青年に変身して、遠からず自ら筆をとって、中国新文学の建設に

献身するのであります。

前に中国の近代文学は魯迅の「狂人日記」によって始まったと申しましたが、その同じ年の1918年、魯迅の実弟である周作人も「日本近代三十年小説之発達」と題した文章を発表しています。題の中の「三十年」というのは、四迷の「浮雲」の出現からの期間を指していますが、同時に、中国近代小説の発足は、日本のと較べて30年も後れている、という感慨をほのめかしているとも読み取られます。この一文は中国人の手による外国近代小説の体系的な紹介の先頭を切ったもので、近代の日中文学関係史を検討する場合、重要な手掛りを提供してくれます。その中で、周作人は日本近代小説の発展を年代的に、流派や主義の盛衰をたどって、自分の意見をさしこみながら、要領よく紹介していますが、とりわけ興味深いのは、「日本文明は支那の娘だ」という通説を必ずしも正確ではないとし、むしろ日本文化は「創造的模倣」というべきだと説いているところです。そして全文の結びとして、次のようにいっています。

《若しわれわれが〈中国小説における〉この弊害を是正するなら、歴史的因襲思想を振り落とし、真心をもって他人を模倣しなければならない。そうすれば、模倣から脱皮して、間もなく独創的な文学が生れるはずである。日本はよいお手本だ。中国小説の現状は明治17、18年頃のそれに似ている。従って目下肝心なことは、外国作品の翻訳と研究を奨励するに如くはない。(中略) 要するに、中国が若し新小説の発展を望むなら、根本からやり直さずを得ない。現在欠くべからずものの第一は、小説とはなにかを説明してくれる。「小説神髓」のような本である。》

ここでも、日本を手本とする洋務運動や変法運動時代の構想が、そのまま継承されています。つまり、日本文学界はまじめに西洋を模倣したお陰で、独創的な作品を多く作ることができて、「20世紀の新文学」の建設に成功した。だから中国人も日本人のやったことを学ぼうではないか、といっているのです。

周作人はそれ以来、日本文学ないし文化の愛好者として、生涯その研究と

紹介に力を尽した人で、近代日中文化交流史上極めて重要な存在でありました。この周作人の呼びかけに^{こた}えてか、外国作品の翻訳、紹介や研究が急に盛んになる。なかんずく日本語からの翻訳が多数を占めている。だがよく調べて見ますと、それらは概して日本人の原作ではなく、西洋の小説や文学理論であることが、すぐ分ります。ここでも、日本語を通じて西洋文学を習得するという前代の図式が、依然として活用されていたのであります。

しかしこのような状態も、時間がたつにつれて急速に変っていきます。新文学運動が始まった頃に中訳されたものは、主に西洋小説や理論の日本語訳の煮なおしでしたが、間もなく日本人の原作小説も、藤村の「破戒」や花袋の「蒲団」を始め、次々と中訳されるようになります。ここで無視できないのは、魯迅と周作人が果たした役割です。この兄弟二人は、1923年に「現代日本小説集」と題する短篇小説集を共訳出版して、日本文学の「創造的模倣」の成果を中国人に示しました。

又同時に、日本人の創意による文学論も翻訳されるようになりました。しかしそれは伝統的な純日本文学論ではもとよりなく、西洋理論の日本化したものばかりです。原作者の名前も挙げますと、夏目漱石、本河久雄、武者小路実篤、有島武郎などありますが、最も多く翻訳されたのは、面白いことに、厨川白村でした。白村の著作で中訳された単行本の数は、同じ本の違った訳本をも含めて、20点近くもあります。白村というの人は、日本ではとうに忘却されているようですが、中国ではもっとも広く読まれた、よって多大な影響を及ぼした日本の評論家でした。それは新文学運動の五四時代に限らず、今でも台湾では、彼の「苦悶の象徴」「象牙の塔を出て」「十字街道を往く」などが、再訳或いは再版されていて、文学青年の愛読書となっています。

そういう訳で、白村について少々お話し致したいと思います。中国人で最も早く白村に着目したのは、外ならぬ魯迅でした。魯迅は「苦悶の象徴」を読んで感激し、素早くそれを翻訳して新聞の文芸欄に連載し、「象牙の塔を出て」をも続けざまに訳出して、両書全冊で1924年に初版を公にしました。魯

迅の翻訳が契機となって、白村ブームが始まります。その結果として、白村の単行著作は全部といってよいほど、中国語の訳本があるようになったのです。その内、「苦悶の象徴」はもっとも歓迎されたと見えて、五つの違った訳本が現に存在しています。

では、どういう訳で白村があんなに好まれたのか。魯迅という中国作家は、日本の文学全般に対して冷淡であったし、2、3の作家を除いて高く評価もしなかった。その魯迅が白村という日本であまり問題にされなかった英文学教授兼評論家にひかれた原因は、一体那邊にあったのか。それは、魯迅ないし当時の中国知識人が、白村の文学観や人生観に類縁性を感じ、それに共鳴したからだ、といっても差し支えありません。白村はもともと文壇から縁遠い人でした。彼は1923年(大正12年)、44歳の若さでなくなりましたが、生前、自惚^{うぬぼれ}の強い独善的な日本文壇のありかたに、違和感を抱いていました。そこで「苦悶の象徴」を著して独特の文学観を披露し、同時に「象牙の塔を出て」や「十字街道を往く」などに収めている数ある評論を書いて、文学方面に限らず、広く社会、政治、道德、宗教、思想、生活問題にわたって、文明批判を行ったのであります。

厨川白村の議論を極簡単に申しますと、「生命力が抑圧を受けるところに生ずる苦悶懊悩が文芸の根柢であり、そしてその表現法が広義の象徴主義である」(「苦悶の象徴」)。今のような生存競争の烈しい時勢にあって、われわれは社会生活、政治生活、経済生活、家庭生活などの現実問題から生れる、内的及び外的衝突葛藤に直面しなければならない。だから文芸ばかりがいつまでも呑気なことをいっては困る。作家文学者は宜しく象牙の塔を出て、十字街道に立って現代人の心を見つめ、思うところを述べるべきだ。まあ、こういうふうなものです。白村自身も白状しているように、これは平素彼が親しんでいた英文学からヒントを得て作った。いわば二番煎し的なものであったのです。

しかし、これは中国では大当たりでした。魯迅は「苦悶の象徴」を評して、

「独自の見解と深い理解が見られる」「一種の創作」と最高の賛辞を呈し（訳本「引言」、又「象牙の塔を出て」などの雑論について、次のようにいっています。

《著者の指摘する微温、中道、妥協、虚偽、狭量、尊大、保守等の世俗の有様は、まるで中国について言っているのではないかと疑ってもいい位です。……著者は既にこれを重病だと見なし、診断の後処方したのであるから、同病の中国に於いて、それを借りて青少年少女達の参考或いは服用に供することも出来よう。恰度^{ちやうど}キニーネが日本人のマラリアを治せる以上は、中国人のそれも治せるように》（同書訳本「後記」）。

ここからも分るように、魯迅の白村に対する興味は、狭い意味の文学以外に向けられています。この二人については、すでに楠原俊代さんの「魯迅と厨川白村」（「中国文学報」第26冊）という少々詳しい比較研究がありますので、それに譲るとして、ただここで少々付け加えたいことがございます。それは、魯迅を代表する中国当時の作家なり知識人が、中国という暗黒かつ頹敗した現象の中で、危機感に落ちいり、苦悶^{きまよ}し彷徨^{さまよ}っていた途端、白村が現れて一つの出口を示したということです。白村の議論は、彼らも彼らなりに漠然と摸索していたことは間違いないが、それが白村によってより明確に提示されたのですから、敬服のあまり、共鳴する外ありませんでした。

勿論、白村の影響は文明批評だけでなく、小説家や文芸評論家の作品にも、その足跡を残しています。現に向培良という作家に「我離開十字街道」と題する中篇小説がございます。これは白村が使った「十字街道」をもじったものですが、この「十字街道」の寓意、すなわちそれは岐路^{きろ}であると同時に、新しい方向や可能性の起点でもある、というのをテーマにした作品です。しかし、白村の著作の中で、日中文学交流に最大の寄与をしたのは、なんといっても「苦悶の象徴」でした。この一冊の本が中国に紹介されてから、「苦悶」という単語が突然流行し始め、文章の中に頻^{ひん}出し、そして或いは作品の主調或いは作品の主題として利用されたことも、一度ならずでありました。ただ

小説における影響は、いちいち作品について詳細に検証しないと申しかねますので、ここではその代りに、評論に及ぼした影響を例にして、一寸触れて見たいと思います。

最も早く、「苦悶の象徴」説を使って小説論を試みたのは、周作人ではないかと思われます。彼は当時論争の^ま的になっていた郁達夫の小説「沈淪」を評するに際して、性的渴望、^{リビド}霊と肉との衝突などいわゆる「現代人の苦悶」を引き合いに、この小説の「芸術的作品」であることを正当化しようと努めています（「沈淪」）。このように白村を引き合いにした評論は、外にも色々ありますが、その代表的な好例は^{せんこうそん}銭杏邨の郁達夫論、すなわち『「達夫代表作」後序』と題する論文です。四十頁^{ページ}にのぼる整った長文ですが、その理論的根柢は外ならぬ白村の「苦悶」説であり、最初に「苦悶の象徴」と「近代文学十講」から、それぞれ一節を引いて前置きとし、それによって議論を進んで行くという方法^とを採っています。案の定、性的苦悶とか、政治的苦悶、経済的苦悶など白村愛用の表現が、文中あちこちにまき散らされていて、「苦悶祭り」の観さえあります。この評論家によりますと、「厨川白村の文芸は苦悶の象徴であるという見解、^{ノルダウ}諾爾度（Max Nordau）の見た現代人の病的な生活は、郁達夫の著作に於いて完全に表現された」、と断言しています。この郁達夫論の当否は別として、ここで注意に値するのは、白村の文学理論は一部の中国評論家から一つの物指しとして使用していたことです。それは、或いは文学作品の価値判断の規準として^{あが}崇められていた、といっても過言ではありません。

郁達夫という作家は、日本の^{インパクト}衝撃の観点から見ると、確かに色々な興味のある問題を含んでいる一人です。しかし、前述のような評論とは裏腹に彼が創作の過程において、直接に白村の影響や示唆を受けたかということになると、疑問の余地があるように思われます。勿論、郁達夫の日本留学期間は、白村が評論家として活躍していた時代とほぼ重なっていますから、すでに単行本になっていた「近代文学十講」（1912）「文芸思潮論」（1914）、「象牙の塔を出て」（1920）などを、原文で読んだ可能性は想像できますが、これといって確

実な証拠はございません。郁達夫の場合の^{ケース}意義はむしろ他の所にあると思います。それは、一つは彼と日本小説との関連であり、もう一つは彼の日本留学体験であります。いわゆる cross-cultural experience です。

郁達夫の日本滞在は、大正元年(1912)から11年までですから、白樺派の全盛期に当り、次いでプロレタリア文学の運動が展開された時代です。東京一高特設予科から名古屋八高を経て、東京帝大経済学科を卒業したこの作家は、留学生時代を顧て、「高等学校在学四年の間、ロシア、ドイツ、イギリス、日本、フランスの小説を約1,000冊読んだ。東京帝大に入学してからも、小説を読む癖を改めることができなかった」(「五、六年来創作生活的回顧」)とっています。これは平均1年250冊というのですから、この文学青年の並々ならぬ小説熱が伺われます。郁達夫にとって、日本は青春の故郷ばかりでなく、近代文学開眼の土地でもあったのです。彼の初期の小説、とりわけ「沈淪」集の三篇が、例外なく日本を背景に、中国留学生と日本女性との係り合いを描いた多情多恨な青春物語であった事は、中国人である彼の日本における cross-cultural な体験と無関係ではないことはいうまでもありません。

郁達夫が読んだ少なからず日本の文学作品の中で、より多く興味を感じ共鳴したのは、自然主義小説から派生して文壇の主流をなした私小説ではないか思います。その外、特定の作家として、佐藤春夫に傾倒した時期があったことは周知の通りです。佐藤春夫について、郁達夫は帰国後、次のように所見を述べたことがあります。

《日本の現代の小説家の中で、私の最も崇拜している作家は佐藤春夫である。彼の小説は、周作人もかって幾篇か訳したことがあったが、あの数篇は決して彼の最大の傑作ではない。彼の作品中の最高のものとしては、当代彼の出世作である「病める薔薇」即ち「田園の憂鬱」を推さなければならない。その外、「指紋」「李太白」など、いずれもこの上なく優美な作品である。》(「海上通信」)

こういう訳もありまして、二人の関係を取扱った比較研究が幾つか現れてお

り、「沈淪」集の諸篇は「田園の憂鬱」の影響を受けている、という見方が一つの定説になっているようです。私もこれに同意するにやぶさかではありません。しかし、若し作家郁達夫の伝記と作品を、日本の影響や衝撃という立場から取り上げるなら、佐藤春夫との出会いや関連だけでなく、もっと広く彼の留学体験全般にわたって、周密に検討しなければ不十分ではないか、と思うのであります。

以上、龍頭蛇尾の嫌いを免れませんが、幾つかの問題を提起しまして、ここでお話を終らせていただきます。

討議要旨

伊藤虎丸氏から、魯迅は日本文学からはあまり影響を受けていないという説があるが、どう考えるか、との質問があり、発表者より、魯迅の興味は日本人の作品に含まれている〈西洋〉を紹介することに興味があったのではないか、なぜなら彼は彼自身を作家としてより啓蒙家として考えており、日本の作家自体には興味を持っていなかったと考える。特に中国人としての魯迅は、日本の自然主義には全くといっていい程興味を示さなかった、との返答があった。